

OKADA-ROOM Vol.7

— いろいろ — 調和の美 —

会期 2017年1月1日(日・祝)~2017年3月5日(日)

平成29年元日から始まるOKADA-ROOMの新たな展示では、陽光の下にある様々な色の調和の美を味わうことが出来る作品をご紹介します。

岡田三郎助は、生前から精緻な色の感覚をもつと称された画家でした。彼が生涯を通じて、様々な光の下にある色の調和を探求し続けたことは、草花を背景にした女性像や、折々の季節や時間に応じた風景の様子といった、彼の作品を通じてうかがい知ることが出来ます。

本展示には、小さな花と緑の野、裸婦の組合せが印象的な《花野》、紫がかかった色合いが美しい大作《富士山(三保にて)》等、岡田ならではの色彩の妙をお楽しみいただける作品が登場いたします。また、藤島武二の《風景》や、青木繁の《朝日》等の作品もあわせて展示します。

出品目録

1	矢調べ	Tasting the Arrow	岡田 三郎助	1893(明治26)頃	72.5×105.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----	-------------------	--------	-------------	------------	----------	----

画塾の卒業制作として描かれた作品。描かれた人物は、画塾に来た清楚な感じの針売りの老人であったと伝わる。また、ポーズは幕末の歴史人物像集『前賢古実』(菊池容斎著)からの引用ではないかと指摘されている。

全体に暗い色調で描かれているが、この時期の岡田は、絵の具を明るく用いる方法を模索し始めていた。そして、まさにこの時期に帰国した黒田清輝や久米桂一郎を通じて、岡田は外光派風の色彩に出会うことになった。

2	日だまり(くつろぎ)	Sunny Side (Intimité)	ラファエル・コラン	1896	60.0×81.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------------	-----------------------	-----------	------	-----------	----------	----

岡田は1897(明治30)年から文部省留学生としてフランスへ渡り、黒田や久米の師であるラファエル・コランのもとで学んだ。本作は師・コランによる作品で《くつろぎ》(Intimité)というタイトルでフランスのサロンに出品されたものである。

戸外で、白いロングスカート姿の女性が読書する様子が描かれている。木々の緑や、木漏れ日を受けた女性の肌・衣装が繊細な色合いが美しい。明るい緑と白のコントラストは、この時期のコランが得意としたものであった。

ラファエル・コラン(1850~1916)

フランス・アカデミーの画家。アカデミックな描写に外光表現を取り入れた、穏健で上品な女性像を得意とした。

コランの薫陶を受けた黒田清輝や久米桂一郎は、帰国後、洋画団体「白馬会」を結成、明治の洋画壇に新風をもたらすことになった。日本の美術品や花々を愛した寡黙な人物で、弟子たちは彼を父のように慕ったという。

3	西洋婦人像	Portrait of a Woman	岡田 三郎助	1900 (明治33)	45.5×38.0	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	---------------------	--------	-------------	-----------	----------	----

本作は留学3年目に描かれたもので、同構図の作品が東京芸術大学大学美術館に所蔵されている。草木を背にした女性の肌や白い服には、木漏れ日が明るく映えている。岡田は留学期に、手紙の中で「緑の色、草と木の遠近色」や「人間の毛と顔の中の黄色」を戸外で描くことの難しさに触れ、「色の見分の稽古」をしていると述べている。岡田はコランのもとで、現地の美術に触れると共に、光の下で微妙に変化する色をよく観察するという事も学んだのであった。

4	薊	Thistles	岡田 三郎助	1908 (明治41)	60.7×45.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	---	----------	--------	-------------	-----------	----------	----

第12回白馬会展への出品作。この時期、岡田は、和装の女性の背景を植物で覆った作品を多く描いた。本作でも、和綴じの本を伏せ、もの憂げな表情で腰掛ける女性の背景全体に、アザミの葉が茂っている。画面全体は葉陰によって和らいだ日光に包まれており、緑の色調で統一されている。しかし、帯締めにさされた赤や、一輪のキキョウの紫がアクセントを添えており、画面の調和を保ちつつ単調さを免れている。岡田の鋭敏な色彩感覚がよく発揮された作品である。

5	富士山(三保にて)	Mt.Fuji (view from Miho)	岡田 三郎助	1920 (大正9)	137.3×197.5	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-----------	--------------------------	--------	------------	-------------	----------	----

三保の松原から富士を望む風景が描かれている。現存する岡田の風景画の中では最大の大きさである。明け方の光が雄大な富士山を照らす風景を、透明感のある色彩で描いている。朝日に輝く雪を被った山頂、グラデーションをなす空や山肌の色彩が優美であり、大きさにも関わらず画面全体の調和が保たれている。

富士山は霊峰とされ、古くから描かれてきたが、近代には国家を象徴するモチーフとして描かれるようになっていった。

6	伊豆山風景	Landscape of Izu	岡田 三郎助	1935 (昭和10)	65.1×100.1	油彩・カンヴァス	館蔵
---	-------	------------------	--------	-------------	------------	----------	----

1935(昭和10)年、岡田は伊豆・熱海を訪れた。本作は投宿していた涼々園から描いたものである。森の陰影の描写は湾の稜線を際立たせ、海面との間にコントラストを生み出している。

熱海には1895(明治28)年から鉄道が開通し、東京からほど近い景勝地として多くの文化人や観光客を集めていた。

7	庭	Garden	岡田 三郎助	1919 (大正8)	45.5×33.3	油彩・カンヴァス (板裏打ち)	館蔵
---	---	--------	--------	------------	-----------	-----------------	----

印象派を思わせる粗い筆致と、大胆な原色の用い方が特徴的な作品。

穏健で上品な作風で知られる岡田だが、一方では、ゴッホの《ひまわり》の複製画や、強い陽射しの下の子を描いた黒田清輝の《木苺》をアトリエにかけていたと伝えられている。鮮やかな色彩のもつ魅力もよく知っていたのだろう。また、本作制作の前年に台湾へ赴いたことも、このような色彩の作品を描ききっかけになったかもしれない。

8	花野	Field of Flowers	岡田 三郎助	1917 (大正6)	65.2×90.8	油彩・カンヴァス	館蔵
---	----	------------------	--------	------------	-----------	----------	----

岡田は生前から、最もよくラファエル・コランの資質を受け継いだ日本人画家であると評されていた。本作はコラン没年の翌年に描かれたもので、岡田にとっては、偉大な師に捧げるオマージュであったのかもしれない。草上に横たわる裸婦という画題が《花月(フロリアル)》(パリ・アラス美術館蔵)等、コランの作品を思わせるとともに、対角線上に裸婦を配する構図や、裸婦の慣まじやかなポーズに岡田なりの創意も見て取れる。第11回文展に出品。

9	少女読書	Reading Girl	岡田 三郎助	1924(大正13)	44.9×33.2	油彩・カンヴァス	館蔵
---	------	--------------	--------	------------	-----------	----------	----

岡田は、いわばプロマイド風の、屈託のない愛らしさを強調した女性像も描くことができた。その才は『主婦之友』の表紙絵等に発揮された。本作もそうした流れに連なる作品であろう。明るい陽射しのもと、バラが咲く庭で読書する少女の姿は、ほのぼのとした幸福感を与えてくれる。

10	丹霞郷	Tanka-kyo	岡田三郎助	1933(昭和8)	53×65.1	油彩・カンヴァス	個人蔵(当館寄託)
----	-----	-----------	-------	-----------	---------	----------	-----------

昭和8(1933)年5月、岡田をはじめとする10人の画家、美術評論家達が長野県へ招かれた。彼らは長野市へ向かう途中、中郷村平出(現飯綱町平出)を通過した際に桃の花が美しい果樹園を見出し、賛美して「丹霞郷」と名付けた。

岡田はしばしば長野を訪れ写生を行い、丹霞郷へは昭和12年まで5回ほど訪れたという。

11	薔薇	Roses	岡田三郎助	1931(昭和6)	45.5×37.9	油彩・カンヴァス	館蔵
----	----	-------	-------	-----------	-----------	----------	----

薔薇は岡田が特に好んだ題材で、多く描いている。本作はその中でも、飽くことなく眺めていたくなるような深みと親しみやすさをそなえた、味わい深い一枚である。

額縁は《丹霞郷》と同じく、裂をあしらい、外枠に漆を塗った凝った作りで、岡田自身による見立てである。岡田は裂や着物の収集家であったが、額に古裂を用いて作品と組み合わせ、その調和を楽しむこともあった。

12	裸婦	Nude	藤島武二	大正時代	60.4×50.0	油彩・カンヴァス	館蔵
----	----	------	------	------	-----------	----------	----

パレットナイフを使った実験意欲旺盛な作品。面的に絵具を重ねて表現された女性の肌の表現が面白い。やや粗いタッチがリズムを生み、女性の生命力をよく伝えてくる。また、女性の髪などに使われた黒い絵具も、上気したような肌の紅色を巧みに引き立たせている。藤島のこのような実験的な筆触は、《イタリアの海》(ブリヂストン美術館蔵)など、明治後期のヨーロッパ留学時代の作例にも見出すことができる。

藤島武二(ふじしま・たけじ、1867~1943)

岡田三郎助とともに日本の近代洋画壇で大きな存在感を発揮した画家。東京美術学校の西洋画科新設の際には岡田とともに助教授となり、のち共同で本郷洋画研究所を設立。さらに第1回の文化勲章とともに受章し、二人は「画壇の双璧」とも呼ばれた。

岡田への追悼文では「上品さが何を描いてもついて廻つてゐた」と岡田の作品を評しつつ、その人柄を「非常に私の強い人」とも称しており、外柔内剛とも称された岡田のひととなりを知悉していた様子がうかがえる。

13	風景	Landscape	藤島武二	昭和期	46.0×33.6	油彩・カンヴァス	館蔵
----	----	-----------	------	-----	-----------	----------	----

藤島は、ヨーロッパ留学以降、苦手と自認していた風景画の制作に注力するようになる。本作では、岩山の間に、青い海が覗いている。岩山は乾き気味の筆で豪快に描かれている。藤島は「サンプリシテ(単純化)」を重視し、複雑な構図を単純化しようと試みたことで知られるが、本作でも岩山の形や全体の構図は整理され、簡略化されている。ただし、岩肌には多くの色を重ねて用いており、画面に深みを与えている。

14 英国風景

Scenery of
England

高木 背水

1911 (明治44)

35.5×50.9cm

油彩・カンヴァス

館蔵

サインから、本作は英国留学中にラフトン(Loughton)で描かれたことが分かる。ラフトンはイングランド東部に位置するエセックス州の町である。高木背水は英国留学中に、現地で活動していた画家・石橋和訓いしばしわくくんの紹介でレナード・ヒル(本業は生理学者・医師)に師事したが、ヒルは1902年からラフトンに住んでいた。恐らくはその関連から、ラフトンの風景を描いたのであろう。けふるような筆致で、緑ゆたかで湿潤しつじゆんな景色が描き出されている。

高木背水(たかぎ・はいすい、1877～1943)

佐賀市松原に生まれる。本名誠一郎。11歳で単身上京。1893(明治26)年頃から岡田三郎助を知り、画塾大幸館に入り本格的に洋画家を志す。苦学を重ねながらアメリカ・イギリスでも学んだ。雅号「背水」は「画家として“背水の陣”で精進する」という決意を示す。デッサンの名手であり、明治天皇の肖像画を描いたことで知られる。大正4年～末年の間は朝鮮にアトリエを構え、現地の美術の振興に尽力した。

15 緑陰

Shady Nook

高木 背水

1911(明治44)

91.0×122.2

油彩・カンヴァス

個人蔵(当館寄託)

《英国風景》同様、英国留学中にヨーロッパで描かれた作品である。青々と豊かに茂った木立の下、一本の川を挟んで、男性と二人の少女が二組描かれている。恐らくは父娘であろうか。片方は本を読み聞かせているようである。木々は陽光を浴びてきらめき、彼らに蔭を投げかけている。のどかで詩情あふれる、高木の英国時代の代表作といえる作品である。

16 朝日

Sunrise

青木 繁

1910(明治43)

72.9×115.2

油彩・カンヴァス

佐賀県立小城高等学校
同窓会賞城会蔵
(当館寄託)

大きくうねる波に朝日が映える、青木の絶筆とされる作品である。青木は1910(明治43年)8月～9月にかけて療養のため唐津を訪れた。本作はそのとき唐津の海に着想を得て描いたもので、不同舎時代の同輩で小城中学校の教員をしていた平島信ひらしましん あつせんの斡旋により同校に納められたと考えられる。本作の描写は、かつて青木が布良ふるで描いた海景画とは異なる静けさを帯びている。2年余りを佐賀で過ごした青木はこの翌年、博多の病院で息を引き取った。

青木繁(あおき・しげる、1882～1911)

久留米市に生まれる。森三美から洋画のほどこきを受け、不同舎を経て東京美術学校に入学。神話・説話を題材とする画稿がこうによって白馬会賞を受賞し脚光きゃっこうを浴びる。1904(明治37)年、千葉県千葉県の布良で《海の幸》(ブリヂストン美術館蔵)を描く。1907(明治40)年、東京勸業博覧会に《わだつみのいろこの宮》(ブリヂストン美術館蔵)を出品、三等賞に終わる。同年帰郷、中央画壇に帰らぬまま28歳で病没した。

佐賀県立美術館

〒840-0041 佐賀県佐賀市城内1-15-23

TEL. 0952-24-3947 FAX. 0952-25-7006

E-mail. hakubi@pref.saga.lg.jp Web. <http://saga-museum.jp/museum/>